

た。みんなで大笑いの思い出であった。

三、日本上陸まで

昭和二十二（一九四七）年、三〇一で栄養失調の検査後、昭和二十二年六月四日帰国のため、一番列車で、多分昭和二十二年ハバロフスクからナホトカへ帰り、新潟の目黒さん（ハーモニカの）同行、昭和二十二年六月二十日舞鶴上陸し、二十三日懐かしの故郷へ親戚、肉親と涙の対面で復員でした。

## 喜 寿 回 想

兵庫県 田 中 康 夫

一、入営、そして北満へ

昭和十八（一九四三）年五月二十七日夜明け前、かねてから狭心症で床に就いていた父が、突然苦しみだし、医師の往診を待ちきれないと言う

ので自転車に乗せ、母が後を押えて医院へ向かう途中、私の背に覆いかぶさるようにして帰らぬ人となった。当日は記念日であり、国民服に巻脚絆で出勤するところ。巻脚絆なしの「喪の日」となってしまう。

その年も暮れるころ、徴兵検査を受ける。村の青年団や職場の友の壮行会を繰り返すうち、ほとんどの若者は入隊してしまった。十九年の夏が過ぎやると令状が来た。「十月一日、秋田東部第五八部隊へ入隊せよ」二年後輩とも一緒になってしまった。既にこの頃の戦況は悪く、「アツツ島玉砕!!」など、報道されていた。戦地へ行けば必ず死ぬ。死ぬことが天皇陛下のため、国のためであるならば、家族のため、自分のために格好をつけて、将校になってやれと考えた。通勤列車では、デッキに出て「軍人勅諭」と「先陣訓」を丸暗記し、体力をつけるため、早朝マラソンをする。

入営の日、多勢の村人に見送られ、加古川駅まで行進する途中、母親へ「戦地へ行けば必ず戦死

すると思うので覚悟をしておいてくれ」と言った。母親は、小さな声で、でも力強くこう言った。「死なずに生きて帰って来てくれ」と。この言葉は今も心に残っている。

兵庫県から秋田へ六十人、山形、青森、旭川へも同様入隊していた。全員、幹候要員である。満州から迎えに来た軍曹に引率され、我が家の前を通過し、下関から釜山へ、着いた所は黒河。山神府七二七部隊の第二機関銃中隊に編入される。

古兵は、昭和十六年の関東大演習で鍛えた「関東演」の「つわもの」であり、全員、秋田県人である。言葉は、半分程度しか理解できない。あれこれ併せて、徹底して制裁を受けた。(この原隊は翌年四月に南方戦線へ行くべく南下したが船がなく、九州へ上陸し、後千葉で終戦を迎えて原隊復帰したとか。満州山神府では、その後へ神武屯の部隊が入り、歩兵山神府二七四部隊となった。我々候補生は、各兵科毎に編制されて、その所属となる)

## 二、予備士官学校へ

昭和二十年四月、師団から集まった候補生の第一次集合教育を受け、七月二日、牡丹江石頭予備士官学校に入学する。幹部教育もあったが教育のほとんどは爆雷を抱えて戦車(大八車)に飛び込む訓練ばかり。ソ連との国際情勢が悪いので、十月に卒業と言われ、日本刀、軍服、眼鏡その他、私物を発注する。金額は、八百円也。一時、国が立替払いをするとのこと。

八月九日夜半の「非常呼集」で「ソ連越境」を知らされる。将校、下士官を含め、約三千五百人を二箇連隊に戦時編成する。私たちの機関銃中隊第一区の八十人も一列横隊に並び、一連番号を称え「偶数一步前へ!!」の号令で二分され、それぞれの連隊に配置された。私は奇数番号だったので、伊藤連隊所属となる。将校が少ないので、候補生が相互で小隊長、分隊長、兵となる。第一方面軍第五軍に配属された。

### 三、開戦

1 十一日午前一時、荒木連隊（荒木貞夫大将の子息、護夫少佐―学校の教育主任）が先発する。掖河で布陣し、内、一箇大隊が磨刀石へ進行し、蛸壺を掘り、約二百車両の敵の戦車群を迎え撃つ。学校での訓練そのままの十キロ爆雷や手榴弾を束ねたもの、アンパンなどで再三繰り返し、肉迫攻撃をする。夜間に切り込み隊を編成して突入するなどして十六日未明まで戦闘する。その間六百五十余名玉砕。敵戦車三十五両擱座。この戦死者の中に私と小学校の同級生と、中学二年後輩の従弟がいる。私の命も出動前に班内で称えた番号の偶数か奇数かの分かれ目が左右したものと、人の運命の不思議を考えさせられた。また、後年、有名になった歌“岸壁の母”の主人公、端野新二候補生も私たちと学友で、歩兵砲分隊にいたが、約二百五十人の敵歩兵に包囲され、足に重傷を負い、その後逃れて数人で満人宅で起居し、農業に従事してい

たが、翌年帰還命令が出された時、彼だけがこれを否定し、行方不明になったとのこと。またこの戦闘について、後日譚として伝えられているが、極東ソ連軍総司令官ワシレッスキー元帥が、この勇猛果敢な肉迫攻撃に対して、「スメルトニック」（陸の特攻隊）と記録したと言われている。このときの戦闘で友軍の砲兵隊が山腹からこの特攻隊を援護したとの記録がある。この敵軍の進行を食い止めた砲兵隊に属していた、と故・高野正夫さんから聞いた（亡くなられた前々年の三〇一大会とき）。この戦闘で、ソ連軍の進攻を阻止したことにより、二十万の日本人が牡丹江から逃避できたと聞く。

2 私たち伊藤連隊（後、小松連隊）は、十二日敵、空挺部隊迎撃の命を受け、東京城方面へ出動する。途中、溢路口（一文字山）で、対戦車の蛸壺を掘り戦闘態勢を整えたり、十四日には、ソ連機五機の空襲を受け、機関砲掃射や、

爆弾投下を受け、数人の戦死者と、十数人の負傷者を出した程度で、行軍に継ぐ行軍で、疲労は極みに達していた。二十一日目から武装解除し、我々二箇大隊と他の部隊の二箇大隊の混成で敦化に集結し、東沙河沿から西沙河沿へと幕舎での自炊生活が始まった。

#### 四、終 戦

「負けるはずのない日本軍が負けた」。十七日ソ連のジープに乗った女性将校が白旗を掲げて、後からやって来た。「やっぱり日本が勝つたのだ」銃に着剣をして取り囲んだ。ロシア語を話せる候補生が隊長との通訳をする。「日本が降伏した」と言う。どうしても信じられなかった。数時間後、ソ連の重戦車が数台やって来た。見て驚いた。一軒の家が動いているようだ。外形は、仕上げ前のゴツゴツの怪物である。兵は、昔アメリカ映画で見たことのある自動小銃（マンドリン）を全員が持っている。彼我の軍備に大差があること

初めて知った。これだけでようやく納得した。次に考えたことは、我々は今度、どうすべきか？このまま生きるべきか、死ぬべきか。先陣訓の教えからすれば、当然生きてはおれない。その日のうちに数人の将校（教官）が殉死した。

十月二十日ころ、帰還のため牡丹江方面へ徒歩で行軍する。鏡泊湖の近くで命令により、砲弾の処理をする。巻脚絆の両端に砲弾を各一箇しばかり、首にかけて運搬し、次々と湖に投入した。十月末、愛河の空兵舎で十日ほど待機する。数日前まで石頭で共に学んだ軍曹の階級章と座金をつけ、ウジ虫に埋もれた学友の死体処理をする。暖かい日は裸になり、シラミ取りに専念した。飯盒の中ブタに入れて行くと、アルミの白さが見えなくなるほどいた。十一月中旬、愛河駅からいよいよ引揚列車と言われて乗車する。ゴトゴトという音は、鴨緑江を渡る鉄橋の音と思っていたのが、ソ満国境黒竜江（アムール河）の橋であった。

## 五、抑留

### 1 最初の収容所

十一月末列車を降りる。一面白雪の原野である。トラック十数台に分乗し、頭からシートをかぶり、寒くてどれだけ走ったか解らないが、着いた所は屋根は丸太の骨組だけが残る全く廃墟の建物である。さっそく翌日から作業開始である。作業は伐採、馬糞による搬出、製材等である。夜は、靴、防寒衣着用のまま、星空を眺めながら、全員横向きになり、友の体温に救いを求めながら夜を明かす。朝になると、隣の戦友は冷たくなっている。この繰り返しで年が変わるころには、上を向いて寝られるようになってきた。死んだ者は裸にされ、凍ったまま春まで空地に野積みされたり、野外では、オオカミや野犬の栄養源になった。一冬で人員が約半減した。

ある日、空腹に耐えられず、炊事場から馬鈴薯ジャガイモを一箇盗んだ兵が捉えられた。皆の前でみせ

しめとして、炊事班長に撲り殺されるのを見た。この収容所の数カ月が我が人生で今までの最も悪夢のような時期であった。日一日と体力が減退していった。この収容所は、フォルモリン地区（第五地区）の二〇一か二〇二収容所で第二五四作業大隊であり、大隊長は、奈良中尉と記憶している。

### 2 赤痢で入室

骨と皮になって「オカ」と認定される。二十一年春先、発熱と下痢で医務室へ隔離される。血便が出る。明らかに赤痢である。息絶えた者は、次々と収容所の外へ運び出される。それでも朦朧とした意識の中で、作業に出ず寝ていられることの有難さを感じていた。

### 3 配置替えと怪我

昭和二十二年初め、エバロンの収容所へ配属（番号不明）。春になって、山の白樺が緑に萌え、野には桔梗やキスゲ、ユウスゲ、山百合が美しく咲いた。やっと自分に、自然を見る感覚

を取り戻した、と思った。作業は第二シベリア鉄道（バム鉄道）建設作業であり、まず崩れた路盤を整備することから始める。そのための土砂が必要となる。山に横穴、縦穴を数十箇所掘り、ダイナマイトで一斉爆破する。その後、トラックで土砂を路盤へ運搬するのであるが、自動車に土を積むための作業として、私は、起重機（エスカロートル）のスコップが土をすくい、車の荷台が下に来たとき、ロープを引いて、スコップを開く作業をしていた。ある日、作業中ロープが切れたので、土砂の山を登り、ロープを修理していたところ、上から岩石が落下してきて顔面に当たった。その後、一昼夜意識不明であった。

4 エバロン病院か、ゴーリン病院か定かではない。左頬の傷は約十センチと大きく口を開いていた。治療方法としては傷口を消毒して、絆創膏二本で張り合わせただけである。大尉の女医さん、少尉の看護婦さんたちに大変お世話に

なった。「国に帰ればお母さんが大変驚くよ」と心配顔で語りかけてくれた。母が私の顔を見るなり、「顔が半分なくなっていると聞いたが、大丈夫やないか」と安心したように言った言葉は今も覚えている。私が怪我をしたとき、同じ隊に同郷の誰かがいたらしく、彼が先に復員して、我が家へこの事故を知らせてくれたらしい。未だにそれが誰なのか判らない。

#### 5 三〇一収容所へ

二十二年の秋、病院から配転された。収容所番号も三〇一会の存在を知ってからのことであり、大隊長名は今の記録を見ると、井上氏と書かれているが今の私の記憶では、元開拓団出身で軍歴も少ない若者でなかったかと思っている。比較的小柄で、ガッチリとした体格を持ち、朝の点呼時の伝達する時など明るい好青年と感じていた。私の小隊は、大原小隊であった。大原さんは、口数は少ないが、デブプリとした親分肌で、しかも心配りがよく、隊の雰囲気

気が明るかった。

ア、作業

最初の作業は、夜中に着いた貨車から食糧品を荷降ろしして倉庫へ運ぶことであった。羊の枝肉を担いで運びながら肉をむしり取って、部屋へ持ち帰った。ペーチカで焼いて食べた。この世の食物とは思えぬほど、おいしかった。翌日は部屋中焼肉の匂いが充満していた。でも誰からも苦情が来なかった。このことだけで、収容所の人間味のようなものを感じた記憶がある。

二十二年の暮れころから橋梁の建設に従事したと思っている。アルマトール（鉄筋）の組み合わせ、コンクリートの流し込みなど、凍結しないように全体に天幕を張り、暖めながら作業をしたことを強く印象に残っている。

イ、青年行動隊に入る

岐阜の稲垣さんが当初、隊長をつとめられたと聞くが、その後任だと思いが、思い出せな

い。大原小隊から斉藤鶴松氏と一緒に入隊する。北見輝夫氏とも親しくなる。確か二人は同年兵だと聞いたように思う。

地区の民主委員会が行進歌を募集していると聞き、応募する。二席に入選した。時々、作業の往復時に皆が歌ってくれた。一人ひそかに嬉しかった。曲は誰もが知っている「男なら……」の曲を借用した。夕食後、隊内で反省会なるものが開催される。助言進行するのが地区の政治教育を受けたであろう、議長である。青白い顔で神経質で、笑顔の見たことのない陰気なリーダーであった。反省会は、テーマに基づいて各自が発言する。他人のことでも容赦なくあばいて、本人の反省を求めるのである。ある日、「同志田中は軍隊の地位でも、また社会人の時の身分などでも、もっと活発に発言したり行動する能力があるのに、日々の行動が消極的すぎる」と反省を求められた。これは困ったことになったと思いつつ、何とか反省の弁を並べて切

り抜けた。ある日の反省会の席で、作業出発前の朝礼時に行っていた「政治情報」をするように指名された。これは週一回各隊から交替で行っていたと思っっている。何一つ情報のない収容所の中では、頼りになるのは「日本新聞」だけである。食堂に置かれていた新聞の数カ月分を読みあさり、二十三年暮れの零下二〇度を越す中、朝礼台に上り、約十分近くもしゃべったと思う。自分は一生懸命だが、聞く方は面白くも何ともない話で大変な苦行であったと思う。

ウ、劇団に入る

何本かの劇に出たように思う。その中で特に記憶に残っているのが次の劇である。故・松原邦夫さんが監督で、ストーリーはソ連との戦闘で負傷した兵（私）が、中国娘（北見氏）に赦けられ一命をとり止める。娘の家で傷をいやし農業労働をしながら勤労の精神に目覚め、生きがいを求めて中国に永住する決意をする。そして、その娘と結ばれるというもの。斉藤氏や十

数人と共演した。

前記の「岸壁の母」の主人公で同期生の端野新二君の戦後の人生が、これと全く同じである。ソ連の戦車との戦闘で負傷した候補生四人が、中国人に赦けられ、農業をしながら世話になる。二十一年八月、中共軍の帰還命令を受けながら、出発の前日、彼は親しくしてた近所の娘さんに会いに行くと言って、そのまま行方不明となった。彼女は唐国麗という十八歳の娘さんであったとか（共にいた候補生の話）。この話を劇が大変似たストーリーであり、十数年後これを知ってから不思議な気持になった。

この頃、滝口新太郎の劇団が来所上演した。舞台裏からプロの俳優の一挙手、一投足を見て、その根性の入れ方に感心した。入隊前は松竹大船の二枚目俳優として林長二郎（長谷川一夫）に次ぐ人として大変人気があり、なつかしく思った。

エ、食堂

新しい食堂で電燈の下、しかも食券なしで食べられる。量も質もだんだんと良くなり、一応満足である。これまでの収容所では四年間で死亡者が二、三人しか出なかったと聞くが、これも大隊長や主計の故飯島さん、民主グループ会長であった故・木下さんたちが、ソ連側とよく協調され、その理解のもと適正な生活環境づくりに努力された成果であったと、今改めて理解している次第である。

#### オ、駅舎の建設

建物の骨組みができ、駅舎内の土壁塗りをすする。雪が降り始めたころ、命綱をつけて凍える手で屋根の木羽張りをすする。高所恐怖症にはとてもノルマでは及ばなかった。その間、何日間か、資材の盗難防止のための焚き火をしながら徹夜の不寝番勤務をする。これも考えてみると不思議なもので、抑留者の日本人がソ連人の泥棒を監視するからである。

#### カ、駅周辺の住宅建設作業

日本人、ソ連人が共同で数千戸が建設された。今、考えてみると、これは特に都市を新しく形成する総合プロジェクトである。まず原野の中に鉄道を敷き、拠点となる駅、次に巾広い道路を縦横に伸ばし、最小限に必要な住宅を建てる。この街は今頃どうなっていることやら：二十四年一月、三〇一収容所は閉鎖された。ダモイのため少しでも東の方へ行きたい。

#### 6 コムソモリスク第三分所

春になると日本から船が来ると言うので皆元気が出た。ここでは三、四階建のマンションを建設する。収容所から現場まで列車で往復した。入隊前、自宅（加古川）から神戸まで、約一時間かけて通勤したことを連想した。鉄筋で組まれた木框の中へ、縦横に渡された歩み板の上をターチカ（一輪車）でコンクリートを運び流し込む。バランスを崩して転覆し、ソ連の監督に幾度か怒鳴られた覚えがある。この街には古いマンションもすでに点在していたが、この

ときに建設ラッシュの最中ではなかったか。この街は整備されると、極東ではハバロフスクに次ぐペリア第二の大都市になるのだと言っていた。果たして今はどうなっているのか、テレビでも見たいものである。但し、当時の建築物はあれから半世紀経過しているので、再建築されたか、ソ連のこの五十年はハイテク軍備増強の期間であり、街は案外あの頃より廃れているのでは…などと考える。

ここで思い出が一つある。用件を言いつけられて一人で歩いてソ連人宅へ行く途中、辛抱が限界にきたので見晴らしの良い空地で放尿中、前方から豪華な毛皮に身を包んだマダムがやって来た。この動作は途中では止められない。十メートルほど向うから大きな声で「ヤポンスキーの大馬鹿者!!」と怒鳴られた。こちらはプライドのない抑留の身ではあるが、このころには少々人間性が復活しており、恥ずかしいやら情けないやらで、小さくなっていた。

## 7 ナホトカの集結所

二十四年七月、やっとナホトカへ来た。二週間もいただろうか、何の仕事をしたか覚えていない。おそらく雑役ばかりだったと思う。ロシア民謡を習ったり、夜になると、日本に帰ったときの行動などグループ討議をしたように思う。ダモイを前にして、皆それぞれが活気に満ち、歩く姿も活発であった。

ある日、トイレに百円の新札が何百枚と散乱していたのが記憶に新しい。

## 六、ダモイ・舞鶴へ

### 1 輸送船

乗船は、昭和二十四年七月十六日、七月二十日舞鶴上陸。船は英彦丸である。東京の山田義秋さんと同じ船で、私たちが一往復早かったようである。島影一つない日本海を走り、陸に近づくとつれ、多くの島が目に入ってくる。上陸したとき、何故か日本の土地が狭苦しく感じ

た。棧橋にはエプロン掛けの多勢の婦人や各種団方の方々が手に手に日の丸を持ち、バンザイ、バンザイと迎えてくれた。ソ連人と無意識に比較してか、これまた、人間が小さく見えて不思議に感じた。

人垣の中、唯黙って急ぎ足で建物へ入って行った。昭和二十四年の復員は、戦犯とされた者以外としては、最終の引揚者であった。収容所によって異なるが、社会主義思想も相当浸透していた。しかしまた、各自により、その思いは多様でもある。だがこの船団は一応赤旗組として帰って来たのである。宿舎で幾らかの手当金を受領した。四日間の滞在中には、予防注射を打ったり、散髪をしたりで身を少し整えた。友人の住所など、書いたものはすべて没収された。せんべいを一袋買い、散髪代とで手当金はなくなってしまった。

## 2 復員列車

七月二十四日列車に乗る。母と弟が迎えに来

てくれており、同席する。この車中の会話は、前記の私の顔の怪我の話と、早く復員ができるようにと、国会やソ連大使館へデモ行進をしたことなどを聞く。大阪あたりへ来た時、神戸新聞の記者が私たちのところへ来て、あれこれ話しかけ、席の三人を写真撮影する。翌日の新聞に「七年ぶりの母子の再会」の見出しで、大きな写真と共に掲載されていた。二、三日後、新聞社から新聞とキャビネ型に引き伸ばした写真が送られてきた。今も大切にアルバムに貼り保存している。駅では多数の村人に迎えられ、感激し、お礼と挨拶を述べた。

## 七、復職

翌日、応召前の職場（神戸市）へ出頭し、手続きをする。任官をしてから出征し、籍は継続していた。後日、判ったことではあるが、昭和十六年に同級生六人が共に就職したが、私と他一人が残り、他は退職し、儲けの多い闇商人になっ

た。

昭和二十四年はマッカーサー指令によるレッドパージの最中であった。パージを受けた約五十人が連日撤回闘争中であった。私が本場（ソ連）帰りとあって、指導をしてくれと彼らの集会に出席を求められ、出席していると、職場から後輩が飛んで来て、「今、こんな会合に出たら即刻首ですよ」と呼び戻しに来る始末。

それから数カ月後、今度は職制として本庁の人事係長の司会で、私より一年早くシベリアから復員した職員と二人で対談することになる。若さに任せて、言いたいことを率直にしゃべった。次回発行の「厚生だより」に内容をそのまま登載し、全職員に配布された。昭和五十五年退職。この間、六カ所のポストを亘り歩いた。その内通算三分の二が選挙管理の仕事をした。その後七年間嘱託勤務し、職場に終止符を打った。あれから早くも十三年が経過した。

この間、昭和二十九年肺結核で左肺三分の一の

切除。昭和二十八年舌ガンの手術と大病を思うが、つらい時はいつも軍隊とシベリア時代を思い起こし、絶えることにより持ちこたえることができた。これまた、幸運という以外の何ものでもないと想っている。

八、シベリア三〇一会を知る

平成に年号が変わる頃、石頭会（前述の元関東軍石頭予備士官学校第十三期生の会で現、生存会員約千人）の第十回全国大会を記念して、新しく名簿が作成された。それに目を通すうち、秋田県人のページに、原隊で集合教育を共にした名前があった。彼と文通する内、原隊（秋田）の戦友会が以前から開催されていることを知り、平成二（一九九〇）年妻と出席し、大変歓待を受ける。しかし、彼は当日欠席したので顔見知りがない。我々初年兵に対して古兵は当然覚えていない。会いたかった班長殿は死亡していた（このような同県人ばかりの部隊では初年兵は参加し難い

雰囲気であった)。

隔年開催のため、平成四年も出席することにした。今回は一人旅と決め、折角、東北まで行くので、人生最後の長旅を考えた。十日間の予定で、まず、佐渡ヶ島へ。そうだ!! 佐渡には北見輝夫氏がいる、と思いついたが住所が判らない。そこで、新潟県庁へ「戦友の尋ね人」として調査方を依頼する。三カ月ほど経ってから県庁から連絡があった。「先方は確認できたが、先方の住所は言えないので連絡があるまで待つて欲しい」とのこと。それから二カ月ほどして東京在住の北見氏から手紙が来た。その中に「昭和五十六年熱海三〇一会出席名簿」が入れられていた。その名簿と前記の石頭会名簿を照合するうち、瀬戸市の中島有道氏を発見。彼に連絡をすると、今回は新潟が当番とのこと。早速佐藤さんに連絡をして入会を依頼、平成五年に初めて出席した。はっきりと記憶にある松原さんは二年前に亡くなられており、親しかった斉藤氏は、相当前に亡くなったとのこと。

と。北見氏とは文通だけで未だ再会していない。

以後、二〇〇〇年大会までに一回欠席したが、楽しく出席させて頂いている(出席二回目とき、和歌山の久保田耕作氏も石頭会の同期生と知り、以後懐かしさが増す)。この会に出席している内、特に感じたことは、皆さんが人間性が豊かで、暖かみのある方ばかりである。戦友会も数多くあるが、お互いに歳を重ね、発展的解消をしている中で、三〇一会は、ますます意気軒昂である。今後、より健康に留意し、この隊列から落伍しないよう、先輩の皆さんのお世話になりたいと思っています。

※今日この頃

今でも月に一度は夢に見る。軍隊やシベリアの苦しい思い出は何だったかと回想する。十九世紀から二十世紀にかけて、世界の先進国は競って弱者を植民地化して行ったが、全世界を巻き込んだこの大戦は歴史にその比がない。未だに戦後処理

が終わらず、何も知らない私たちの孫に時代にま  
で、その「ツケ」を残すことになった。当時の為  
政者の行為は許されるものではないが、その責任  
の一端は、我々にもあることを自覚し、老いたり  
といえども今後の政治の動向に大いに関心を持  
ち、せめてもの行動として一票を厳正に行使し、  
後世に恥じない日本国でありたいと願っている。

身近では、折にふれ東西に遠く離れて住む息子  
たちの家族を気遣いながら、老妻には相変わらず  
面倒をかけつつ、互いに山ほどの投薬に安心を求  
めながら、昨日は絵描さん、今日は植木屋さん  
と、筆や鋏と仲良くしている昨今であります。

## シベリア回顧録

静岡県 有川 隆雄

### 一、終戦時から収容まで

昭和十七（一九四二）年十一月、通信省より関  
東軍固定通信隊へ軍属として従軍中徴兵検査をう  
け現地入隊。七七七部隊（第一国境守備隊）

二十年関東軍通信学校へ入学転属、八月開戦と  
同時に学校解散原隊復帰を命ぜられ、牡丹江に向  
け列車移動中鉄橋爆破により原隊復帰ならず十人  
ほどで歩き廻りソ満国境名月湖付近の小学校で武  
装解除され、列車、トラックと歩きを重ね、十月  
中旬ころ三〇一収容所に入った。

### 二、収容所の作業

囚人の収容所のあとで荒れており越冬準備作業  
（屋根のコバ張り、内側の壁塗り自活のための薪